

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 佐藤 淳一

本論は〈型〉という語に表象される、定式的、様式的なものの生み出す普遍性と、それに照らし返されてくる固有性、という観点から、あらためて谷崎潤一郎の創作活動を捉え直し、その作品の再評価を提起した論考である。

構成は9章から成る。序・1・2章では、「悪魔主義」と言われる初期作品から、いわゆる「古典回帰」を果たした『蓼喰ふ虫』『春琴抄』までが扱われている。総じて初期作品においては物語世界に即した表現とそれを意味づける語りとの位相差が目立ち、それがともすれば観念的な「白」のイメージの追求に作者を駆り立てていく傾向があるという。こうした傾向がやがて、『蓼喰ふ虫』における文楽との出会いを契機に、定型的、重層的な様式によって創出される美と、それに反照される自らの固有性の発見へと変革されていく過程が明らかにされている。『春琴抄』の作品論である第3章においては、作品の語り、厳しい修行こそが芸を完成させるという主張と、春琴の背後に嗜虐性を暴いていく語りとの二層に分け、火傷、失明事件を契機に前者が後者を凌駕していく過程が分析されている。従来「古典回帰」といわれて来た内容に関し、その実質を〈型〉の持つ意味の発見、という観点からあらたな解釈を提示した点に本論の独創を認めることができる。

第3・4・5章は、「旧訳」と言われる谷崎の『源氏物語』の現代語訳(1939～41)の意義を論じた上で、『猫と庄造と二人のをんな』と『細雪』において、それらが表現技法としていかに転用されていくかが分析されている。すなわち「移り詞」に代表されるような、作中人物の心情表現と地の文との境界を意図的に臙化していく技法が、『猫と庄造と二人のをんな』においては、接続詞的な語句を多用することによって、会話と地の文がそれぞれ固有の性格を維持しつつ、第三者的な視点を前面に出さない「第三の虚構空間」の創出に応用されていくのであるという。直接話法的な表現をいかに地の文と自然に接続させるかという、近代小説における言文一致の課題を考察する上で傾聴に値する意見である。また、『細雪』においては、語り手が物語の内容を概括した上で、それが作中の幸子の認識に再び引き戻されていく点に、やはり同様の効果が指摘されている。一見過剰とも思われる花見などの生活習慣の描写は、こうした引き戻しによって、連続性と一回性とのあらたな対比を生み出していくのであるという。

第6・7・終章においては、いわゆる「新訳」(1951～54)を「旧訳」と比較した上で、会話と地の文を輻輳させる方法が「新訳」で後退している事実に着目し、最晩年の『鍵』に至る過程で、谷崎が分析的な近代的知性と、〈型〉を通して美を析出して行こうとする志向との間で最後まで葛藤し続けていた様相が導き出されている。

谷崎の全創作活動を跡づけるためにはなおいくつかの作品を補足的に検討する必要も認められるが、総じて、従来、古典文学研究と近代文学研究の境界に置き忘れられていた観のある「谷崎源氏」に本格的な検討のメスを入れ、近代小説の方法的な課題を抽出した成果は高い評価に値する。

以上の点から本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。